

第四章 ステツキイ一の最期

2023/1/27 追加・修正 by OHYABU

(一)

闇の中、声が聞こえてくる。

……子供の声？

キャツキャツと、複数の甲高い声が聞こえはじめる。

——ピネロン人？

——マークないし、耳尖ってないよ。ID時計もつけてるし。

——でもヤバそう。

——違うよ、この人は……。

——怖い。早く誰かに知らせようよ。

——違うよ！この人は。パパが言ってた人だ。だから空から降ってきたんだ！

キャワキャワキャワキャワ。

(うるさい……うるさい……)

「うるさい！」

我慢できずに、目を開け、叫んだ。

と、同時に、自分が仰向けに寝かされていることに気づく。

その若い男は、長い髪や肌や瞳の色が薄めで、ピネロン人によくある特徴を示してはいなかった。耳は尖っておらずピネロンマークも見えず、一見すると地球人しか見えなかった。

他の特徴としては、顔は若干歪んでいて左右の目の大きさが違っており、顔のあちこちには切り傷がいくつも。

「くそっ！」

なんとか上半身を起こした。見ると目の前には、十歳にも満たないであろう幼い子供たちが十数人、びっくりして集まって固まっていた。

男は状況がわからずに困惑。次の瞬間——

ぐうぐ。

腹が思いつきり鳴った。

「くー！」

男が顔をゆがめると、その顔が面白かったのが、いつせいに子供たちが笑いはじめた。男はさらに困惑し、気力をとり戻そうと力を込める。

しかし——

体に力を入れようとしても、力が入らない！

(なぜ？……くそっ！)

ようやく、自分がすっかり衰弱しきっていることに気がついた。

(こんなところで……こんなところで……ダメだ！ここはどこだ！)

はあはあ息を切らしながら、あたりを見わたした。

薄暗い、廃墟のような建物の中だ。

ごく一部しか見えない。視野が狭まっていると感じた。

苦しくなって首を落とすと、自分に下半身に、布のようなものがかけられているのが見えた。

もう一度首を上げて前を見ると、子供たちは笑うのをやめ、遠くからおそるおそるじつと自分を見つめている。

男はハッと気づいた。

(助けて……くれたのか?)

ふっと意識が遠のこうとするのを防ぐように、男は必至で唇を噛む。

そして、ようやく英語で叫んだ。

「ステッキ……長い棒は……どこだ！」

子供たちは、幕を開けるかのようにもさつと左右に引いた。その先には、長いステッキが置かれていた。

男はそのまま、はあく大きく息を吸い、

「いいか……誰にも言うな！絶対言うな……さもないと……」

そうふり絞って声を出すと、再び意識を失ってしまった。

「ステッキイーからの連絡は、あれからまだないのか？」

ホイヘンスは振り返った。

彼の宇宙船の中、彼の執務室でだ。

ヤートが奪ったはずの電子鞭は、彼の手に戻っていた。

振り返った先には、イモシと、もうひとりの人物。

ホイヘンスより若干背は低いが、細め。全身黒づくめ。上半身から足のものあたりまでは、真っ黒いポンチョのようなものをスポツとかぶっていた。

手にも黒い手袋、足にも黒い靴。頭も口も黒い布で覆われ、顔で見えているのは尖った耳と目のみ。ほんのわずかに露出した皮膚の色は、ピネロン人としては濃いようにも見えた。

イモシは、すぐ隣にいるその人物をにらみつける。

しかし黒づくめの人物は、黒目がちな瞳を目の前のホイヘンスの方に向けたまま、悠然と首を横に振り、

「まだ体が慣れておらぬのでしよう。いきなりの任務でしたから、ムリがたたっているやもしれませぬ。どこかで体を休めておるのでしよう」

その声は高く、女声の領域に達するものだった。

イモシはカッとなり、

「のんきなことを！もしつかまっておいたら……」

「ハッキング成功、身分偽造に成功との報告は受けております。ピネロンマークは隠し、

耳も切っておりません。万が一つかまってもすぐにはバレませぬ」

「まだ言うかゲルゴン！そもそも薬が足りなかったのではないか？」

「心臓止めたらなんにもなりません！」

ゲルゴンと呼ばれた人物の目が、初めて動き、イモシをギロツとにらんだ。

地球は——ピネロン星よりも微生物やウイルスが多い。そのためピネロン人がなんの対策もとらずに暮らすと、なんらかの病気にかかることが多く、場合によっては死に至る危険すらあったのだ。それを防ぐためにも長期間滞在のさいには、時間をかけて耐性をつけさせるのが通常だった。短期の場合は薬でごまかすことができたが、それでも効果が出るまでには一定時間かかる。

効果の出る時間を短縮させるには、薬の量を増やすしかないが、副作用で心臓の動きを止めるリスクがあった。

そうであっても、とイモシ。「お前たちサップスの体は鍛え抜かれてるはずではないのか？」

「お言葉ですが……」ゲルゴンは目を大きくこじ開け、「薬への耐性は、各人遺伝子の気まぐれ。体を鍛えた鍛えてないとは関係なきこと。精神論ではありません。そのうえで、もしどうしようもなければ本人が責任を取ります」

「それこそいいかげんな精神論ではないか！」

「イモシ！」ホイヘンスがようやく声をあげた。「騒がずとも今は待つしかない。事は慎重にでかまわん。そもそも、地球にサップスたちを大量に入れ込むには向こうの住民データを人数分改変する必要がある、そうアドバイスしてきたのはお前だろうだが！」

「ですが……」

「お前はスピンに命じて、一刻も早く船や戦闘機の修復と建造を進めさせる。そのための知恵を授ける。それがわしの腹心たるお前の仕事だ！」

その間に、サップスたちを送り込んで、わが方からの大規模攻撃が可能になるまでにするだけ地球を弱体化させる。それがサップス団長たるゲルゴンの仕事だ！」

「はい……」とイモシ。

「ハ！」と、ゲルゴンは深々と頭を下げる。

ホイヘンスは苦々しい顔で、天井を見上げ、

「あのいまましい木星戦、あれでわが方はどれほどの損害をこうむったか。ともかく立て直しのためには、時間を稼がねばならない。ただ……地球側の被害も少なくはないはず。今すぐには出てこれまいよ。万が一ステッキイーが失敗したとしても、今の段階ならまだ取り戻せる。焦ることはない」

「おこがましいようですが、閣下」とゲルゴンは頭を上げ、「ステッキイーは、子供の頃よりわれが育てた一期生。そのうえ最も優秀なハッカーでもあります。失敗はさせませぬ」
「わかっているわ、そなたを信じておる。それにしても、あの混乱をぬつての派遣とは……。わしらが事後処理に手一杯ななか、よくぞ今回の作戦を提案してくれたものだ」

「われが気づいておるぐらいですから、地球側も何か行っておるでしょう。気をつけねばなりません」

「わかつておるわ」

「では閣下」とゲルゴンは右手を左胸におき、頭を下げた。

そして、しばらくそのままの姿勢で動かずにいた。すると徐々に体が薄まっっていく。ホイヘンスはそれを中断させるように、

「待て、離れる前に答えろ！ 例の件、記憶にはないか？」

するとゲルゴンの体は元通りの濃さに。手を下ろし、再び顔を上げた。

そしてゆっくりと首を横に振り、

「われの血はわれにとって是最も遠きもの。ただ……」と、自分の瞳を指し、「ラフランスの次男坊は、われより黒いそうですね」

これを見てイモシはハツとなった。

「ホイヘンス様、あやつを探しに向かわさなくてもよいのですか？」

「わざわざサップスどもを使うこともあるまい」

「ですが銃をもっております。あやつの特異な力もある」

「そうならないように、奴の力が使える施設をチェックしたのではなかったのか？まだ漏れがあるのか？」

「い、いえ。ですが生きていればホイヘンス様のお命を……」

「本当にわしを殺したければ、これを持って行ったはずでは？」

そう言ってホイヘンスは、電子鞭を持ち上げた。

「単に、落とすただけでは？」とイモシ。

「……かもしれんがな」

苦笑しつつホイヘンスは、遠い目で天井を見上げた。

(一)

少し前のこと――

ヤートは、ピネロン星の大地に、ぼうぜんと座り込んでいた。ぶ厚い防脚服のようなものを全身に着込んだ状態で。

唯一透けて見える目のあたりは、汗ダラダラになっていた。

「う！」

銃を持った右手で、不器用に左腕を支えた。

(痛みが取れない……まだ出血してるのか……腕が熱い……)

しかし不透明な服なので、傷口の状況がわからない。

苦しげに息を切らしながら、なんとか顔をあげて空を見上げた。

どんよりした空の雲は激しく動いている。

(今は……いつなのか？)

時間がわからない。夜が何度来たのかわからない。

顔を落として前をみた。灰色の大地だ。^死の砂漠^と呼ばれる地。

時おりばちばちと小さな音が響く。砂漠から巻き上げられる小さな石が、防脚服に当たるからであった。風が強いことを感じとれる唯一の体感であった。

ゆっくりとろしを振り返った。高い壁が続いていた。^ハビタブルスポット^をとり囲む壁だ。

へハビタブルスポットとは――

上空の放射線量が少なく、人間が長期間生存可能な土地のこと。両極周辺と海を除いた大陸の全領域を覆うへ死の砂漠の中に、浮島のように点在している。ここでは、上空に漂うエキゾチック・マターがフィルターとなっているのか、大量の放射線が雨や雪に混じって降ってくることはほとんどなかったのだ。

ただ地上は違った。へ死の砂漠の砂――放射性物質が含まれる砂――が、時に強い風によつてひんぱんに巻き散らされていたからだ。

砂を防ぐ自然物は海と森しかなかったが、森は星全体からすれば占める面積はわずか。惑星全体から見れば、酷暑と極寒の間の限られた場所にしかなかったためだ。さらに、砂漠にはなぜか木は根づかず、植林で増やすこともできなかった。

そうしたなかピネロン星の人類の体には、進化の過程で、ある特殊なセンサーが組み込まれることとなった。

最も放射線から保護されるべき頭部に隣接した部分――両方のこめかみ部分にその特殊な器官は発達した。放射線が多くなると、ここから特殊ホルモンが放出され、すぐに頭痛という信号につながり、身を守ることができたのだ。その器官は、大半の人たちには「ピネロンマーク」という十字のあざとなって表面上に浮き出していた。

さらにピネロン星の人類の文明は、放射線の脅威から逃れるために、地下中心に栄えていくことになった。

幸いなことに地下の土壌は掘りやすく、しかも放射性物質を通しにくい性質をもっていた。水は放射性物質を濾した層を流れ、森となつているところに流れ込みそこから地下に染み出し、豊かな地下水路を形成していた。地下を照らす光は、最初は化学反応から作り出していたが、のちに上空での陽光発電から得た電力によつてまかなうことになっていった。人々は定期的に外の光を浴びることを怠らなければ、健康に暮らすことができた。

長年の文明の積み重ねで、地下には巨大な交通網が整備され、エキゾチック・マターを扱える技術を手に入れてからは、堅固な地下都市が形成されていった。また宇宙開発も、陽光発電機器を成層圏に飛ばすことから始まったことによつて、地球より早く加速していった。

それでも、食物の多くは地上から得なければならず、大型の宇宙機器も地上で組み立てなくてはならない。そういう3K的なことにたざさわる人たちはカーストのように固定化され、地上で暮らすことを余儀なくされていた。

宇宙開発にたざさわる科学者や技術者たちも、多くが地上にいた。最初に地球との交流を行ったのは彼らであった。地球から送られてきた原子素材でへハビタブルスポットを囲む壁を築いたのも、彼らであった。

放射性物質を含むへ死の砂漠からの飛来物からの脅威が減ったことで、人類は地上での暮らしをより安全に行えるようになった。守られたへハビタブルスポットは、居住用、工場用、行政地区などと機能を特化させ、居住用の場合は「市」と呼ばれることになった。各へハビタブルスポット間は、宇宙開発でつちかった技術を応用させた「車」で結び、地上での交通網。地上航路が整備されていった。

そうした大変革が、地球と交流をもつてからわずか十年も満たない間に行われた。

ただし、惑星全体から見れば、酷暑と極寒の間の限られた場所においてであったが。それでも、豊かな生活を手に入れた地上に住む人々は、地下世界の権力からの指示を聞かなくなった。

そして、水源確保の問題がきっかけで、内戦が起こったのだ。

およそそこまでのことを、ヤートは父から聞いていた。

(で、ここはどこなのか……)

痛みをこらえながら、地平線向こうまで続いているだろう灰色の大地を見つめた。

トロント市はどこにあるのか。そもそも現在地もわからないのだが。

銃はある。だが使うのはもう嫌だ。もう思い出したくもない！

人間の叫び声が耳に残っているのだ。ホイヘンスから逃れるさい、無我夢中でこの銃を何度も撃った記憶も。

その後の記憶はない。気づくと壁の中に倒れていた。

目覚めると、家々の連なる中にある広場の真ん中。どこかの「市」だと思った。

次の瞬間、人々が自分を囲んでいることに気づいた。

目を開けたとたん、急にあたりが騒々しくなった

——こいつ、地球人だ！

——地球人の血がまじってやがる！

ヤートはあっけにとられた。すぐに自分への激しい殺意を感じた。

(ぼくのこと？ぼくが地球人だって？)

自分のもつ黒い髪と黒い瞳は、ジロジロ見られたり、珍しがられたりすることはひんぱんではあったものの、地球人と言われたことなど一度もなかったからだ。

髪と目の色以外はピネロン人そのものだと、ピネロンマークを指して見せたが、人々は受けつける余裕をもたなかった

——木星で殺された仲間たちのかたきだ！

そう言っつて、襲いかかってきた。

命の危機を感じたヤートは、銃を握った。

人々があとずさりしたすきに、逃げるしかなかった。

(いったい……これは……!)

ヤートはわけがわからず混乱していた。

ともかく前へ、人がいないところへ、無我夢中で。

途中、干していた布を引っばがし、それで頭を隠し、無我夢中で走った。

地下道への入り口が見えた。しかし、立ち止まる。

(ダメだ！入り口で脳波をキャッチされてしまう！)

方向を変え、他の「市」に移るための「移動塔」に駆け込んだ。

多くの人々がいたが、騒動が伝わっていなかったのか、特に自分に注意を向けない。

それでも、他の「市」に移るための「車」に乗ることは、寸前で躊躇した。

(ここもダメだ！脳波がキャッチされてしまう。居場所がバレてしまう。なんとか遮断しないと)

「移動塔」に隣接した倉庫に飛び込んだ。そこで壁の外に出るための防御服が積んであ

るのを発見。監視の姿はなかったため、勝手に何着かの防御服を持って、倉庫の奥の出入り口から外に飛び出た。壁の外に出るさいの脳波チェックは、その逆にくらべて脆弱なことを、子供の頃の経験から知っていたからだ。

そして、血が飛び散らないよう何着かの服を重ねて、脳波センサーが埋め込まれているらしいところを狙って自分の左腕を撃ったのだった。

痛みがひどくなってきた。息も荒くなりながら、ヤートは壁を見つめていた。

「移動塔」に「車」が行き来しているのが、遠くから見えた。

(これから……どうしたらいいんだろう)

家族の中で自分だけがもつ「黒」は、先祖返りしたものだだろうと父に言われていた。

父は自身が、水源である森に住んでいたために滅ぼされた、芸能を得意としていた民の血を引いているのだと言っていた。

(そういえばぼくの性のラフラスって、古い言葉で「森」だと……)

そのラフラスという言葉に、ホイヘンスは何を察したのか？

しかし、もはやそれ以上のことを考える気力も失っていた。

ヤートは力つきたように地面に倒れた。

(このまま死ぬのか……義姉さん……)

思い出すのは、父母や兄よりも、血のつながらない地球人の義理の姉の姿だ。

母親と同じく仕事で忙しかったはずなのに、母親以上に自分を可愛がってくれた。間違っ

って壁の外に出してしまった時にも、必死で探し出してくれた。

(いつもぼくのことを、かわいい小熊ちゃんって……。私といっしょにいれば、あなたの

黒は目立たないわ、なんて言ってくれた)

黒い瞳に、縮れた黒い髪、黒い肌。冗談っぽい口調で自身を「黒いマリア」などと称し

ていた。そんな神様の像が地球にはあるのだと。

たしかに……義姉は神様だった！

そして確信した。トーカサス星で自分を守ってくれたレーザーバリヤーは、あきらかに

彼女が開発したものだということ。

(マリア義姉さん、会いたい……)

もう生きていないかもしれない、それでもトロント市に戻りたい！

だが体が動かない。

このまま死ぬのか。

(何……誰……?)

しかし、意識は遠ざかっていった。

「あれから数週間経つか……」

ホイヘンスは天井を見つめたまま、独り言のようにつぶやいた。

イモシは、晴れ晴れとした顔で、「脳波センサーを無効にしてるなら、身元不明で処理されてる可能性も……」

「本当にバカなお坊ちゃまだ！」

ホイヘンスはイモシの声をさえぎるように、大声をあげる。

「地球側がご丁寧にも送ってくれた映像は、わしが指示しなくてもわしの信奉者どもが勝手に書き換え、拡散してくれておるわ。民衆はいきりたつとるわ。そんななかにあの髪と目をさらしたらどうなるかも知りもせず……。」

わしに居所を知られたくないがために自分の体を傷つけるなど、そんなことしたらこのピネロン星では生きていけないことも考えもせず……。」

「ホイヘンス様……いったい、誰をお探なのでしょう？その者とヤートとはどういう関係で？」

「黒い髪と黒い瞳だ」

「はあ？」

「わしが探し出す。あの黒い髪の遊星仮面も含めてな」

宇宙船の窓まで歩き、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。闇に向けて――

(三)

――闇。

闇のなかを進むと、足元は血の海。

切り裂かれた人の体や、飛び出た内臓がモザイクとなり、自分に絡みつく。

「……………」

ピーターは、自分の叫び声で目覚めた。

ソクラトン邸の自宅のベッドの上だと気づいて、大きくため息をついた。

汗だらけである。

(まただ……この悪夢からいつ解放されるのか……)

起きているときは忘れられても、寝ると悪夢にうなされる。

地球に戻ってからまる三日間、意識がなかった。

気がつくと、リンダが手を握って泣いていた。そばには、急ぎよ中央ユーラシアから戻ってきたソクラトンが心配そうに立っていた。

ずっとうなされていたというが、ほとんど何を言っているのかわからなかったそうだ。真つ先に、どこに行っていたかを問われたが、適当にごまかすしかなかった。

ソクラトンは、それ以上は追求せず、代わりにキンスキーに連れ去られたソニカの行方を告げた。

ニックから、ローレル島にいるという連絡を受けたと言う。

ローレル島は、極地・海洋区にある内地軍の重要管轄地。もともとは、海底地下につくられた緊急避難空間への出入り口として作られた人口島であった。

海底地下空間は、人類の緊急避難用として、[△]逸失の日[▽]の後に整備されてきたもの。その上につくられていた地上での一時滞在施設を改造して、ピネロン人用の収容施設はつく

られた。

現在の責任者はあのロペス。收容されているのはおもに一般の民間人だが、「事情を抱えた者」も原則ここに收容されることになっていた。ピネロン人用の收容所の中では最も規模が大きく、病院施設なども完備されていたからだ。だからピーターの母マリアもいた。彼女のような病人のほかにも、孤児や、乳飲み子を抱えた母親や、高齢者や障がい者なども、原則ここに收容されることになっていた。

ピネロン語がほとんど話せないソニカも、「事情を抱えた者」として扱われ、それ相応の対応をされていると説明された。

じつは、ソニカはキニスキーに連れられ、別施設に收容される予定だったのだが、ロペスの部下が「かなり危ういやり方」で彼女を連れだしたのだという。

この事実を、ピーターとともに初めて知ったリンダは、激しく憤った。

「だったらどうしてここに戻してくれないの!」

しかしソクラトンは、暗い顔で首を横に振った。

そして語った。今回の件はキニスキーがソクラトンに配慮して、世間的には極秘としたが、次はそうはいかなくなる。そうなると今度はピーターの身が危うくなるだろう。おそらく彼にすべての疑惑が向けられるようになるだろうと。

リンダは、なぜピーターが、と反論しようとしたが、途中でぐっと言葉を飲み込んだ。どうしようもない複雑な状況を、絶望的に理解した。

「……わかった。もう誰も、いなくなつてほしくない」

リンダの納得を確認したあと、ソクラトンは再び、木星戦の後処理のためだとして、中央ユーラシアにある防衛隊本部へ向かった。

その途中、ソクラトンはピーターに突然連絡を入れてきた。

南米に立ち寄り、軍隊での訓練に入っていたレザーに会ったという。直接ソニカの事情を語り、自分の責任だと言って謝ったという。それに対しレザーは予想外に冷静で、誰も責めることなく、事態を静かに受けとめていたという。

あれから数週間たつが、ピーターはいまだレザーに連絡を入れられないままだった。

ソニカを救えなかったこと、そのことを自分の口から伝えられなかったことを、なによりも恥じていた。

さらに、彼女の現在の状況を確認できなかったことも、ピーターの無力感に火をつけていた。

(レザー、すまない。僕は何もできなかった……)

じつはほんの数日前、ピーターはローレル島へ向かったのだ。「遊星仮面」として! 母とソニカの状況をどうしても知りたくて。

もう二度としたくないと思つていた装いで、もう二度と乗りたくないと思つていたライダーに乗つて、周辺まで近づいた。

しかし、島が見えた時点で、見えない壁にライダーは跳ね返され、それ以上進めなかった。空間を超えることすらできなかった。

島を囲むように、特殊なレーザー防御壁が張られているようだった。

(あの時と同じものだ！)

トーカーサス星で、ピネロン側の施設に突っ込もうとした時、ライダーを跳ね返したバリヤー。あとになって、自分のライダーを包むバリヤーと同じ類のものだと気がついた。それらと、ローレル島をひそかに囲むバリヤーとは同じもの。同じものであるだけに、相容れないのだ。

おそらくロペスは、自分が来るのを予想し、防御策を講じていた。彼は本当に、いったい何者なのだ？木星で彼が連れていた小さな者たちの正体は？トーカーサス星の、ピネロン側施設内にいた黒髪の青年。彼もいったい何者？そう考えていたところで、思考は打ち切られた。

ピンポーン、ピンポーン。

呼び鈴が邸内に鳴り響いていることに、ようやく気がついた。

ピーターが立ち上がると、呼び鈴は止まった。

やがて、玄関のドアがバンと開く音が。

ピーターは仰天した。ソニカの件があったことで、この家の玄関のドアは、自分とリンダとソクラトンの三人にしか開けられないように設定されていたからだ。さらに、必ずモニターでのチェックをしてでないと、ドアは内から開けないように気をつけていた。なのに、外から勝手に開いた。

リンダでもソクラトンでもない。リンダは人見知りかひどく、めったにひとりでは外出しないし、ソクラトンが帰るなら、必ず連絡があるはず。なにより二人とも、あんな乱暴な開け方はしない。

誰だ！

ピーターが息をひそめて身構えていたところ――

「ガキども、起きてないのか！」

女性のダミ声が、響いた。

「宅配員を困らせるな！」

ピーターが部屋から飛び出すと――

「うわ！」

いきなり、水をかぶってしまった。

すぐ横を見ると、バケツを持ってぶるぶる震えているリンダが立ち尽くしていた。

玄関に向かって水をかけるつもりが、自分がいきなり部屋から飛び出したことで、手元が狂ったのだと察した。

リンダは困惑しつつ、それでも玄関を見やった。

ピーターも見た。メガネをかけ、短いスカートをはき、左右に長い栗色の三つ編みを垂らした、見知らぬ若い女性が腕組みをしたまま厳しい表情で立っていた。

なぜか左手にだけ赤い手袋。その手には大きな袋が。

すぐにそれは、定期的に配送されてくる食材袋だと察した。玄関でたまたま、持っていた宅配員と鉢合わせになったのだらう。

「どろぼー、出てけ――！」

「違うんだ、リンダ！」

ピーターは、残った水をかけようとしていたリンダを止め、少し女性に近づいた。

ようやくこの若い女性の素性と、この家の玄関を開けることができた理由が分かった。

「ベルタ・グラナドさんですね。教授からうかがってましたが……」

「まず体拭きなさい。風邪ひくわよ」

「あ、はい」

ベルタと呼ばれた女性は、少し表情を和らげながらも厳しい口調で、

「宅配員さんたち、みんなふらふらなのよ。ピネロン人がいなくなったから、いまやどこでも人出不足。そういうこと考慮してね。出られなければ、置いていっていいよとせめてだけでも声かけて！」

「あ……」

そんな事情、考えたこともなかった。

(四)

あの木星での戦いは、地球が大勝利という報道がなされたものの、じつは地球側にも想定以上の死傷者が出ていた。

それも、直接の戦いでよりも、帰還のさいでの事故によるものの方が多かった。ローカル・ワームホームの不安定さに加え、戦闘で被った機器の破損などによって、予期せぬ衝突事故や爆発が相次いだのだ。

しかし、それらのほとんどが戦闘中での被害、名誉の戦死として報じられ、戦意高揚に利用された。

さらに、捕虜として拘束されている同胞へのピネロン星での虐待疑惑がさかんに報じられた。逆に戦意を萎えさせてはいけないという意図なのか、ピネロンの民間人を巻き込んだ人質船の大爆発の映像は表立ってはほとんど流されなかった。

兵員募集のため、徴兵も実施されはじめた。産業界も財閥もすべてが戦時体制へと向かっていった。

ソクラトンは、目覚めたピーターに、外出するさいにはピネロンマークが見えないような深い帽子をかぶるようにと、強く言いわたした。また、自宅周辺の警備をより厳重にし、ピーターがあまり外出しなくて済むように、信頼のおける業者に食材の宅配やゴミ収集などを頼んだ。

そのまましておいて、ソクラトンは中央ユーラシアの防衛隊本部へと向かったのだが、直後、今度はリンダが寝込んでしまった。ソニカを奪われた悲しみと、ピーターを看病しなくてはいけない不安と疲労で、すっかり消耗しきっていたのだ。

ソクラトンは再び戻ることができなかった。代わりに、ボディーガードを派遣したことをピーターに伝えてきた。

軍中央に近い、屈強な軍人を。

ピーターは、自分への監視も兼ねていることを察した。

しかしまさか、こんなにも若い女性だったとは、予想外であった。

ベルタは、外に置いていた自分の荷物を、邸内に入れた。ソニカがいた部屋を使うことになった。

リンダは抵抗したが、客室を除けばその部屋しかなかったのだ。

ソニカは連れ去されるさい、アルギナだけは持つていつていた。それ以外のわずかな荷物は、リンダが引きとった。

ピーターが手伝うなか、リンダは離れたところからずっと嫌そうな顔をして、二人の作業を突っ立ったまま見ていた。

ようやく作業が終わった。

ベルタは、左右に垂れた三つ編みを左右の手でぎゅっとつかんで、ふうと深呼吸し、

「あたしは内地軍 極地・海洋区第五師団所属の軍曹。あなたたちの護衛としての特別任務を遂行するため、これから一緒に暮らします」

「……極地・海洋区？」

北米区からではなく、わざわざ極地・海洋区から？

ピーターは府に落ちなかった。

ベルタはそんな彼の気持ちを察してか、

「なんであたしがそんな遠くからきたのかの理由は二つ」と、指でVサイン。そして人差し指を立て「一つは、教師の免許も持つてるから」

「教師？」

「オンラインだけじゃなく、外に出て学ぶことも必要」と、ベルタは離れたところで突っ立ったままのリンダをチラリと見て、「あたしが時々連れまわします。無理強いはしないけどね」

「はあ……」

ピーターは、叔父アブラハムと同じぐらいの年齢の、姉のようなこの若い女性に圧倒されっぱなしだった。

ウインクしたり、ジェスチャーをさかんにつけたりと、やたら動きがハデなのだ。

今度は手で自分を指さし、

「軍も人手不足で、派遣されたのはあたしひとりだけど、あたしひとりでもあなたたちを守りぬきます。射撃は副司令にはかなわないけど、体術ならティエン外地司令並みよ」

「副司令？……ニック副司令！」

「そう、あの人は見かけによらず、いろいろ凄い」

そうなのかと、ピーターは驚いた。

「あ、それとね」とベルタ。「あたし料理は得意じゃないから、今まで通りあなたたちがしてあたしを食べさせてね」

「はあ……」

ベルタは、今度はぐるりと部屋中を見わたし。

「思ったより片付いてるわね。ちゃんと生活できてるようね。上官が心配してたんだけど」

「上官？」

「あたしはここに来るのに、上官のいるローレル島を寄ってきたの」

「！」

「そう、それが二つ目の理由なのよ」
ロペスの部下なのか！

なら、僕のことも知ってるのか？

「おっと、これを持ってきたの。コピーだけど」と、ベルタは手元に持っていたカバンから、きちんと封をした封書を取り出した。

それを開けると、何枚かの、元は鉛筆で書かれた楽譜が。

「あ……」

リンダが声をあげ、走り寄ってきた。

楽譜を手にとつて、ベルタの顔を見た。

「おねえちやま元気なの？」

「元気よ。だってあたしが助け出したんだから」

ピーターはハツとなった。「あなたが？」

「そうよ。書類をちよちよつと偽造してね。送り先を変えて、それで連れ出して……」

「大丈夫なんですか？！」

「結果オーライよ。そもそも彼女のような「要注意」な民間人は、最近の規定じゃフツの収容所じゃなくローレル島へ送ることになってるの。「事情を抱えた者」としてね。だからあたしをまともに訴えたら、逆に規定違反を突かれるはずよ。たとえ総司令お気に入り、キニスキー少尉であつてもね」

「要注意？」

「トーカーサス星からどうやって地球に戻れたのかが不明だから、いまだ「要注意」にもなってるの」

「あ……」ピーターは言葉に詰まった。

「おねえちやまは悪い人じゃない！」とリンダ。

「そうだけど、今はそうしておいたほうがいいのよ」

「おねえちやまはどうしてるの？！」

「特別待遇ってわけじゃないけど、個室にいるわ。で、鉛筆と紙と定規が欲しいって言うから渡したら、五線譜つてもんつくつて、一日中そんな楽譜を書いている。手がかからないというか、独特というか、なんとというか……」とベルタはリンダが持った楽譜を指さし、
「その方が写真より信用できるはずって、彼女が言つてた」

「ああ……」

リンダは少し安心したように楽譜を宝物のように抱え、肩を震わせながら、自分の部屋へと走り去った。

ベルタは黙つて、肩こりを治すかのように首をカクカク回し、左右に垂れた三つ編みを左右の手でぎゅっとなつかんだ。

そして、心配そうにリンダの去った先を見て、

「ソニカ、心配してたわ、あの子のことを」

「……」

「でもまあ……大丈夫ね」

ベルタは、少し安堵の表情を浮かべた。

ソニカをきちんと名前で呼ぶことから、この人は信用できるかもしれない、とピーターは感じた。

それなら聞いてみようかと、おそろおそろ、

「あなたは、ほかになにか上官から聞いてませんか」

「?さっきも言ったでしょ、お母さんは順調に回復してますって」

「僕のことです、僕のことでなにか」

「はあ?それならあたしが聞きたいわ。あんたあたしの上官に何したの?あんたが時々いなくなっても気にしなくていいって、どういう意味?あたしはあんたたちを守りにきたのに」

ピーターは、げんそうな表情を浮かべたベルタの顔を見た。

ウソはついていない。

(この人は本当に、僕のことは何も聞かされてないんだ)

少しほっとし、安どの表情を浮かべた。

「はあ?」ベルタはピーターの顔を見て不服そうに、「なんなのその顔?……まあいいわ。でもあんまり出歩かないでね。あんたのピネロンマークは危険。あの木星戦以来、世の中がピリピリしてる。シリカス副艦長も消息を絶ったし」

「え!」ピーターは仰天した。「どういうことです!」

「正確には、家族とともに身を隠してる。安全のために。世間の非難から逃れるためにね」
「ど、どうしてなんです!あの人は命をかけて地球を守ったんですよ!あの人がいなくなったらこの地球は……」

「それが事実でも、社会の事実じゃそうなくなってるのよ。どうもロイ艦長の名誉を守ろうとする勢力があるらしくって、シリカス副艦長が子供を盾にしたから敵に逆ギレされて猛攻撃されて大勢の死傷者を出したって、一時期そんなコメントがニュースで流れたのよ」
「ビッツ総司令やニック副司令の指示で?!」

「まさか!でもあの人たちがいくら命令系統を整備しても、地球はピネロン星みたいに独裁的じゃない。まだまだいろんな思惑が入り込める余地があるのよ」

「ああ……」

ピーターは口を抑えた。

あの人が非難されるとしたら、僕は?

僕はあの時、大勢殺した。僕こそ非難されるべきでは?

あんなに人を殺したのに、なにこともなかったかのように、笑っていたりする。

僕は、僕は……。

「ピーター?」

ベルタの声の聲が響いた。

ピーターはハッととなり、ベルタを見た。

「すみません、大丈夫です」

「忘れてたわ、上官から言われてたこと。あんた感受性強いからいろいろ気をつけてるって」

「……」

「なので——」と、ベルタはバタバタと手足を動かし、「気分転換に旅行に行かない?」

「はあ？」

(五)

「はあ？」

ホイヘンスは顔をゆがめながらも、絞った声で交信器に話す。

「それはどこからの要望だ？ いったい、どれだけお前たちの言い分を聞いてやったと……と、いやまて！ それはたしかに必要だな。そうだなたしかに……」

そして、耳をそばだてようとしていたイモシに気づき、彼を手でしっしと払う。

「弟からか？ いつから親密になった？……まあいいわ。負傷兵たちのケアをしばらく頼む！」

ホイヘンスはきびしい顔で、交信器をバンと置いた。

成層圏に浮かぶ彼の船の中で。

イモシは、コホンと咳払いし、

「レガイトからですか？ あまり無理を言うようなら……」

「無理ではない。たしかにそのとおりだ。それがわからなかったお前もボンクラだな」

「へ？」

ホイヘンスは、あつけにとられるイモシを無視するかのようにはスタスタ歩き、部屋の中
央に立った。

「ゲルゴン！」

ホイヘンスが呼ぶと、黒い影が突如現れた。

「ハッ！」

ゲルゴンだ。ひざまずき、首を垂れている。

「サップスたちの準備は整ったか？」とホイヘンス。

「ようやく数十人分の書き換えに成功したとの連絡が。これで第一陣が潜入できます。加えて、外地軍司令官のティエンが、今極秘に地球に戻っているとの情報」

「それは好都合だ。あいつはピッツお気に入りのキレ者だ。そいつが今いないとなれば、さっそく……」

と言ったあと、げげんそうな顔で、

「で、結局ステッキイは今まで何をしてきたのだ？」

「やはり、体調不良だったと」

「ウソでないのか？」と、イモシ。

「イモシ！」とホイヘンス。「お前は今からスピンのもとへ行つて、状況をあらためさせろ！ サップスたちの安全な移動手段も確保させるのだ！」

「あ、はい」

イモシはその場を去る。

彼が去ったのを確認してから、ホイヘンスはひざまずいたままのゲルゴンに命じる。

「もうよい。立て！」

そして、立ち上がったゲルゴンに対し、「あとで新たな命令を伝える。官僚どもと内容を

つめてからだが……」

「なんなりと。ただ攻撃対象をこれ以上増やすのは……」

「攻撃ではない。ある品を潜入して盗み、そして回収する」

「地球で？」

「そうだ」

「何をです？」

「あとで指示する。まあせいぜいひとりで抱えられる程度のものだ」

「ならステッキーにその任務をまかせましょう。いったん帰国させたいので」

「よからう。彼を回収するために向かわせる要員もそなたが選べ」と言つて、ホイヘンスは大きくため息をついた。

「どうなされたのです？」とゲルゴン。

「官僚どもの手助けから抜け出すには、まだまだのようだがな」

「焦られませぬように。閣下のご時世はこれからののですから。われは閣下の恩情で救われた者。何があろうとも閣下とともに。……ですがあのイモシという男は？」

「そなたたちが空間移動できるようとりはからった者ではないか」

「失礼ながら、逆に申せばそれだけでして」

「新参者だから気になるか？だがわしは若い頃奴に会ったことがある」

「だから信じられると？」

「……ではお前は？お前はなぜステッキーを信じられるのだ？」

「奴はわれが見つけ、われが育てましたから」

「育てた？奴とは十も離れておらんだろうが」

ゲルゴンは、少し沈黙したあと、

「われらは「ソルドの落とし子」。あの過酷な内戦で親を失った子供たちの一部」

さらに、また少し沈黙したあと、

「われが奴と会ったのは、奴が五、六歳の時。内戦は遠に終わっておりましたが、孤児たちは地下のいたるところに隠れ住んでおりました。子供が子供を育ててもおかしくない状況でした……」

そう言つてゲルゴンは静かに目を閉じた。

闇が広がる世界へ――

闇は、地球の夜の闇へとつながっていた。

廃墟の中、ランプの薄明りのなかで、ステッキーは、服を着替えて立っていた。ステッキを持って。

まわりには十数人の子供たちが。

「おじさん、もう行くの？」

「ああ」

「外、真つ黒なのに大丈夫？」

「問題ない」

「おじさん、また来てね」とある子供が言うが、すぐに他の子供がたしなめる。「ダメよ、

あたしたちここからいなくなるんだから」

ステッキィーは首をひねった。

「どこへ行くんだ？」

「パパやママの代わりに」ところ」「これからみんなで行くんだって」と、複数の子供たちが声をあげた。

ステッキィーは、この子供たちの親が軍人で、この戦争で親を亡くし、たとえ親がひとり残されていても親戚がいたとしても、さまざまな事情で育ててもらえない状況にあることを聞いていた。

軍人たち専用の宿舎に集められていたが、周辺が忙しすぎ、一時的に見捨てられた状態になっていたようだ。

自分が倒れていたこの廃墟は、その宿舎に近いところにある、彼らの遊び場だった。

「ふん、ようやく救いの手が差し伸べられたってわけか。オレのことは誰にも言っていないよな」

子供たちはうなずいた。

「一度聞こうと思ってたんだが、なんでオレを助けた？」

「おじさんは、パパが言った人に似てたから」と、ひとりの子供が声をあげた。

「？」

「パパが空から伝えてきたの。木星で髪の毛の長い人が助けてくれたって。おじさんが空から降ってきた時は、きつとそうなんじゃないかって」

「はあ？」

「パパはあとでお星さまになったけど、今も僕たちを守ってるんだ。だからおじさんが来たんだ」

「……オレはなにもしてないぞ」

「おじさんはあたしたちを守ってくれたじゃない？」

「？」

「変な人が来ても追い払ってくれた」「面白い映像見せてくれた」「その杖で食べ物煮てくれた」

子供たちの次々の証言に、ステッキィーは苦笑した。

（このステッキで電波をひろっただけだよ。電波で食べ物を煮ただけだよ）

単に、自分を守るために行ったことにすぎないのに、と。

宿舎のセキュリティが甘くなっている不審者が増え、さらに子供たちの家のインフラが止まって火を起こせなくなっていた。そういう状況に自分が対応したのは、体力が戻るまで彼らに世話をしてもらい、かつ彼らが騒ぐのを封じるためだった。

要するに、自分を守るために行ってきたことにすぎなかったのに――

（もしかしたら……）

年長者がそばにいることの安心感があったのかもしれない。かつての自分のように。

（おっと！）

ステッキィーはパンと頬を叩いた。

（考えるな。いつまでも相手におれない）

ふうと深呼吸したあと、子供たちに向かって、

「じゃあな、礼は言うぜ。だけどオレのことは誰にも言うなよ」
「わかってる。おじさん、これあげる。みんなでつくったんだ」「おじさん、悪い奴らをや
つつけてよ。ピネロン人をやつつけて！」と、子供たちはわいわい。
「ああ……」

彼らからわたされたのは、クレヨンで自分を描いた絵だ。
裏には文字が。

「読んでね。今度そこへみんなで行くの。また遊びに来てね！」

ステッキイーは、子供たちの顔を見た。

期待の目、泣きそうになった目。

信頼の目に押され、「わかった……」と受けとった。

そしてステッキイーは、ステッキを空に掲げ、いつきに空高く飛び上がった。

下からは、子供たちの声が

「うわー凄い！」

「おじさ〜ん、きつと来てね、きつと来てね！」

ステッキイーは、しばらく空に浮かび上がり、着地した。

上空には飛行機が飛び交っている。

それを見やりながら、ニヤリと笑った。

(お前らにオレは見えないよ。このステッキがオレを守ってくれてるからな)

そして、子供たちから送られた絵を手に握っていることに気づいた。

(まだ持ってたのか……)

迷いなく、びりびり破り捨てた。

(オレとしたことが……)

思わず子供たちにこびてしまった。

秘密を知る者は情はかけずに始末しろと、常にゲルゴンから言われているのに、なん
のかこのザマは。

自分と同じ、孤児になった子供たちだからか？つい目こぼしてしまったのか？

(オレは物心ついた頃から暗闇の中を逃げてた。いつも飢えていた。食べ物のことしか考
えてなかった。オレは親というものを知らなかった。あいつらとは違うんだ！)

それなのに、彼らを見逃した。

(だがまあいい、あんなガキどもの言うことなど誰も信じるものか)

気をとり直し、彼はステッキを掲げた。しばらくそのままにしておいて、ゆっくりと地
面に下ろした。

ステッキのまわりに浮かび上がる幾何学模様。

ステッキイーはそれを目くぼせし、合図を送る。

(電波を呼び寄せ、基盤を拡大し映し出し、脳波で遠隔操作しハッキングする。こんなピ
ネロンの科学を、お前らはマネできない！)

自分はサップスだ。苦しむ同胞のために、祖国のために任務に果たすのだ。
そう自分を納得させようとする彼の眼下には、街が。

戦時統制によって、すでに漆黒の闇に包まれてしまっていた。

(六)

真夜中の漆黒の闇。

中央ユーラシア区、防衛部本部ビル周辺。

護衛の足音だけが響く、静けさのなか――

いきなり、警報が鳴り響く！

あたりの建物に、いつせいに照明がつく。

待機していた兵士たちの影が映る。

その間を抜ける黒い影。

そこに銃声！

影はいったん止まるが、また動き始める。

しかし――

将校クラスの服を着た兵士がひとり、無言で突進してきた。

黒い影に激突！――そして、あつという間にその全身を縛りあげた。

見ると黒い影は、全身黒ずくめの人間で、こめかみにはピネロンマークが。先ほどの弾が当たっていたのか、肩から血が流れていた。

「顎を外せ！」

どこからかビッツの大声。

ピネロン人の男をとり押さえていた将校は、右手で一気に男の顎をつかみ、うめき声すらあげさせずに一気に力を込めた。

さらに男の両肩もはずし、両手も縛りあげ、踏みつける。

立ち上がった将校、その正体は意外にも小柄な女性だった。

彼女は、ビッツがビルから出てくるのを見て、あわてて懐から何かを取り出し、彼に向かってまいた。

すると、あたりに黒いもやが。

ビッツの声だけが響いた。「ティエン！」

「無謀なことを！」とビッツ。

「無謀は総司令！不用意に出てきてどっかから狙われたらどうする気だったんですか！」と、ティエンと呼ばれた先ほどの将校。

「あんな煙幕をまかれる方がよっぽど危険だ。上でニックが見張っておったわ」

本部ビル内の司令官室内で、明るい照明のもと、立って二人は話していた。

ティエンは、純粹のアフリカ系に見えたが、東アジア系の血も混じっていた。小柄だが、肩幅が広くがっしりとした体形の三十歳台の女性であった。

彼女は不満げな顔で、ビッツに対し、

「そのニック副司令がしとめられなかった奴ですよ。仲間がいなかったのはただの偶然」

「だからこそ、いきなり生身で突進するな!……と言っても君は聞かんだろうが。だが君は今や外地司令だ。少しは責任をもって自分の身を守れ!……あれはサップスだ」

「サップス!」
「間違いはない」

ホイヘンスの私設軍隊であるサップスの存在は、地球側にもようやく知られるようになってきていた。ホイヘンスが前政権を倒せたのも、圧制を行えるのも、秘密警察として動き、汚れ仕事をもいとわない彼らがいてだということだとは、地球側にも漏れ伝わってきた。

ピネロン軍による侵攻直前、ホイヘンスは地球にも必ず彼らを送り込むはずだと伝えてきた向こうの官僚もいたが、すぐに消息不明になってしまったと、ビッツは言う。

「彼は言っておったそうだが、サップスは失敗すれば必ず自死すると……。わしが顎をはずせと命じたのはそのためだ。自爆しなかったのは運が良かっただけだ」

「だからさつき……」

ティエンはぶるつと震えた。

瀕死状態の男の口の中を洗い、証言を得ようと顎を治したとたん、舌を噛み切った。

さらにあわてる周囲のすきを突いて、頭を机の角にぶつけ、絶命したのだ。

ビッツは続ける。

「数日前、甥のアルバートから連絡があった。個人データ集約システムがハッキングされたと。調べたら、最初にハッキングされた記録は数週間前だ」

「数週間前?では」

「おそらく木星戦のどさくさにまぎれて先遣隊——ハッカーを送り込んできていたのだ。ハッカーはまず自分用を書き換え、安全な居場所を確保して、そこからいつきに数百人分を書き換えただろうと。今までの戦場での行方不明者や、向こうで捕虜になつてる者の数がそれぐらいだからな」

「手にした死者や捕虜からID時計をブン取つてたど?」

「そういうことになるな」

「エグっ!でもそれでしたら、誰のがどう書き換えられたのかはわかるはずですよね?」

しかしビッツは首を横に振り、「へ逸失の日以前のデータがない。データに蓄積がないから、追跡には困難な点があるらしい。それに、個人データ以外にも書き換えられる可能性もある。いろいろ慎重にならざるをえない」

「どっちにせよ地球人に化したサップスが、もうすでに何人も入り込んできていると?」

「警備を強化したら、それが証明されたというわけだ」

「か——っ!」ティエンは頭をかいた。

ビッツは続ける。

「ピネロン側も損害が激しく、今は大がかりな攻撃に出られんのだろう。その間はテロでこちらをひっかけまわそうという計略だ」

「うー」ティエンは頭をかきながら、「こつちも要員を送りましたよ。ただ情報収集が目的で、戦闘が目的じゃないですけどね。なのにピネロン側は、地球人として堂々長期潜伏できる情報収集員、つてか戦闘要員を送り込んできていた……。ああ、なんたること、ぜんぜん規模が違つてるじゃないですか。くそっ!」

「重要箇所の警備を強化しよう、命令は出しておる」

「こつちもワームホールの管理を強化し、敵の侵入を防ぐよう命令を出しましたよ。でも容易に入って来られた。くそっ!」

「地球の機器では検知できない遮断システムを使ってきているようだ。現在科学者総出で対策を進めているが……うわっ!」

ビッツは仰天した。ティエンの顔がすぐ間近にあったからだ。

「ビッツ総司令!やっぱ私を火星に戻してください!」

ティエンはビッツにつめ寄り、「敵は私が異動のために地球に戻ったわずかなすきを狙ったんです!ハッカーがその情報をどこかでつかんだ。そうに違いない!今からでも遅くないから私を火星へ!最前線で奴らを食い止めてやる!」

しかしビッツは首を横に振り、「ダメだ!異動先は変えない」

「なぜ!」

「今からだからこそ、君が向かうのは月だ!地球防衛に徹するのだ。月からでも君になら火星情勢はしっかり見えるはずだ」

「ですが……」

「君が火星にいても月にいても、兵士たちに指示できることは同じだ。君の不在を狙ったのは事実かもしれんが、ならこちらも次の一手を打たねばならん」

「……」

ティエンはいったん顔を伏せ、少しうしろに下がって、再び顔をあげた。「わかりました」

そこへ――

室内に光の点滅が。

「誰だ!」とビッツ。

「私です。話が決まりました!」ニツクの声だ。

「入れ!」

ビッツがそう言うと、ドアが開いた。

二人の人物が入ってきた。ニツクと、彼と同じぐらいの背の高さの、長身の女性。

女性は若くはないが、フリルのついた相当に場違いなハデな服装をし、うれしそうにニツクの腕にしがみついていた。

「?」

ティエンはあんぐりとなった。

ニツクは困惑気味に、「妹だ」

その妹は、ティエンを見るなり目を輝かせ、

「きゃあ、ティエン外地司令!」

ニツクから離れ、大声をはりあげ、ティエンに走り寄った。

「ファラン・ティエン外地軍司令官殿ですね!」

「あ……はい」

「私、ネティマ・ニツクと申します。私、司令官殿のファンです!強くてたくましい女性、ああなんてステキなの!」

私もお兄さま……いえ兄とともに、この地球国を支えるために、夫と共に協力してまい

りますす！」

そう言って、ティエンの両手を自分の両手で握って、ぶんぶん振る。

「はあ……」

困惑気なティエン。

そこへ、ビッツが助け船を出す。

「やあ、ネティマ殿、今日はサンジェイ殿は？」

「あ……ビッツ総司令官殿、大変失礼いたしました」と、ネティマはぺこりと頭を下げ、

「夫は用事で……あ！そうだ、お伝えするのを忘れておりました。総司令官殿の奥様のご要望どおりの船を手配できました。近くお届けいたします」

「え？……あ、ああ！あの件ですか？」

「そうです。私どもニック海運は、軍の最高位の奥様の慈善事業にご協力できることは、本当に本当に光栄です……」

「ネティマ！」ニックは困ったように声をあげ「あ、総司令、申しわけありません。まだ正式な契約署名がまだです、あとでまた……」

部屋を出ていこうとするニックに、ササッとティエンが近づく。

「ニック副司令？」

耳元で小声で、「てっきり、パートナーを変えられたのかと」

「だとしても女性はいない。そういう君は？」

「変わりませんよ」

「会ってきたのか？」

「一日だけ。今はそれどころでは……。できればすぐにも出発しますので」

「……検討を祈る」

そう言い残し、ニックはネティマとともに部屋を出ていった。

「お兄さま、いったい何のお話で？私に内緒で……」

ダダをこねるようなネティマの声が、ビッツとティエンにも聞こえてきた。

ティエンは苦笑し、

「副司令は、たしか世代的には……」

「何が言いたいのかわかるが、どちらも養子ではなく実子だと聞いておる。顔は全然似てなくとも、年子だ」

「年子！四十半ばなんですか！」

「五人の子持ちだ。なのに若いとか幼いとか、少なくとも性格も含め、兄とは全然似とらん。さらに自分の夫よりも、兄にベッタリなのだ」

「はは、なかなか個性的な方で……。でも海運から軍事産業への参入とのうわさは本当だったんですね」

「リース財閥が今回の件で、世間からだいぶ非難を受け、相当に内輪もめも起こしておるからな」

「そこにニック海運が割って入る。たしかに、副司令の身内というバックは絶大！」

「ネティマはあんな感じだが、夫のサンジェイや娘や息子たちは優秀だ。こちらとしてもいろいろ好都合。ただ誤解を招きかねないのであまり特別扱いはできません」

ビッツはため息をつき、

「ロイをかばいシリカスを陥れたデマも、ロイの遠縁であるリースあたりから流したんだろうと踏んでおる。証拠はないがな。シリカスには申しわけないが、騒ぎが落ち着いた頃に、名誉回復の処置をとろうと考える。」

リースは巨大になりすぎた。だが今後は従ってもらわないと困る。大統領もだ」

「大統領は、実家とは方向性が違うでしょ？」

「ピネロン人を利用してきた点では同じだ。どちらも障害だ。今後は内地の防衛を強化し、ピネロン人の管理と捕獲をより厳重にせねばなるまい」

「でも役に立つピネロン人は使った方がいいのでは？大統領の主張じゃないけど」

ティエンの一言に、ビッツは不機嫌になる。

「わしは君に何度も言ってきたはずだ。他人が自分のような頭の持ち主だと考えることはやめろと。ひとりひとりを見極められるほど人間は賢くない。基本はシステムで考えねばこせん。その上で柔軟に対応することだ。」

大統領の考えなどはわしから言わせればある意味残酷で、リスクがありすぎる。あわれみは逆に危険だ」

「……いえ、私だって、ピネロン人は嫌いですけどね」

(管理と捕獲……)

ピーターは、絶望的な気持ちになっていた。

遠いソクラトン邸の自室でトランクを開け、ビッツたちの会話を聞いていたのだ。

(七)

数日後――

ピーターは、北米の大きな港の、フェリー船の前に立っていた。

デッキの上からは、子供たちのきゃっきゃとした声が聞こえる。

夏に近いこの時期、ピーターは涼しげな服装ながらも、帽子だけはきつくかぶっていた。

リンダは、不安げな顔で、ピーターの後ろにくっついていた。

ベルタはリンダのうしろに、少し離れて立っていた。インカの末裔の誇りよ、などと言つて、原色の民族服を着こんでいた。左手には赤い手袋をはめたままだが。

彼女のハデさを珍しがり、子供たちはデッキからピーターたちを見に集まっていた。

リンダはますますおびえる。

ピーターは振り返って、うらめしそうにベルタを見やった。

しかしベルタはご機嫌だ。

「こういう時じゃないと故郷の服着れないからね、それより、あんたの方こそ何？冬服入れたトランクと一緒に荷物に出さなかったの？それって空なんですよ」と、ピーターが持っているトランクを指さした。

「お父さんの形見なの」とリンダ。振り向かないでそっけなく答える。

「ふうん」

ベルタは、リンダからいまだ警戒されていることに、苦笑する。
やがて、兵士たち数人がやってきた。

ID時計を見せろというのだ。

リンダは不安げに、「また……」

「大丈夫、これで最後。こんな時期だからチェックは念入りなのよ」とベルタ。
兵士たちは、ピーターにトランクを開けさせた。たしかに空だった。

その上、ピーターに帽子も脱げと命じる。

ベルタは兵士たちをさえぎるように、「ちょっと聞きたいんだけど、護衛はあただけ？
他には誰にも来てないの？」

しかし兵士たちはベルタを無視し、

「帽子は脱いで下さい」

ピーターはやむなく帽子を脱ぐ。

すると、デッキから彼らを見ていた子供の一人が叫んだ。「ピネロン人だ！」

距離があるので、大部分の子供たちにはピーターのピネロンマークは見えない。

それでもピーターを見て、一部の子供たちが騒ぎはじめた。

リンダは抗議しようとしたが、兵士たちからのチェックの最中で、動けない。

ピーターは、ほっとため息をつき、暗い顔でうつむいた。

(もしかしたら、何人かは僕のせいかもしれない……)

数日前のことを思い出していた。

「フェリーでの大西洋縦断？」とピーター。

ソクラトン邸での夕食でのこと。

ベルタは豪快に肉を食べ、離れた隅でリンダはこそこそサラダを食べ、ピーターはベルタの前でパンとサラダとスープを食べていた。

「そう、前に話した時は予定だったけど、正式に決まった。船が用意できたらいいの。で、あたしは護衛要員のひとりに抜擢よ。みんな今忙しすぎて手が回らないの」

「……テロ対策にとられてですか？」

ベルタは手を止め、じろりとピーターをにらみあげる。「なんで？」

ピーターはあわてて、「い、いえ」

「まあいいわ」と、ベルタはまた食べはじめ、「あんた何かと鋭いから。でもその通りよ。サップスとかいうヤバいのが入り込んできてるらしいのよ。警戒はしてたんだけど、インフラがいくつか爆破されたらしい。パニック起こさないように国民には伏せてるけど」

「僕たちには伏せなくていいんですか？」

「いずれはバレる。それまであたしがあんたたちを監視してるから」

「……なんで中止にしないんですか？」

「最高権力者サマのご意向には逆らえない」

「ビッツ総司令の？」

「その上の」

「へ？」

「ビッツ総司令の奥さんよ。元教育関係者で、今じゃいくつものNGOを立ち上げてボランティア活動に専念してるの。で、今回の戦争で身寄りがなくなった軍関係の子供たちを保護して、南米にある自分が運営する宿舍付きの学校に送り届けようとしてる。その子供たちの護衛を頼まれたってわけよ。」

で、あんたたちも一緒に来るの。あんたたちだけを残しておくのもヤバイから」

「というより、僕の監視ができないからですね」

ベルタはまた手を止め、ピーターを見やって苦笑した。

ピーターはそれを見て、「いいんですか？」

ベルタはうなずいた。

「あたしを招集する以上やむをえないということで、許可は出てる」

「そうですか……」

しかし――

「わたしは行きたくない！」

リンダが横から割って入ってきた。

「リンダちゃん？」

「行きたくない。わたしといっしょだったらピーターもここにいていいんじゃないの？」

「リンダ……」

「ピーターがまたいじめられる。わたしも、たくさん人がいたら……」

「リンダちゃん」ベルタは、おびえるリンダに優しく声をかけ、「あたしが護衛を頼まれてるのは、戦争で母さんお父さんを亡くした小さい子供たちなの。いろんなところから集められて、数十人はいる。できれば一緒に遊んでほしいんだけど」

「……お母さん？お父さん？」

「そう、ゆっくり考えてね。……ん？どうしたの、ピーター？」

ピーターは食べるのをやめ、凍りついていた。

ベルタは少し驚き、

「ピーター？」

「木星で……死んだ人の子も？」

「いるかもしれないけど、開戦時にも大勢死んでるわよ」

(う……)

ピーターは立ち上がり、急ぎキッチンへ向かった。

(落ち着け、落ち着け……)

呼吸が激しくなっているのを、なんとか抑えようと何度か深呼吸した。そして、できるかぎりの笑顔でふり返り、

「ほかに食べたいものは？」

「十分よ」とベルタ。

「ピーターも食べて」とリンダ。

ピーターは、なんとか平静を装いながら席へと戻る。

ベルタはじろりと、観察的な視線を彼に向け、

「あんた、本当に家事は何でもできるのね。料理も上手だし」

「父はなかなか家に帰ってきませんでしたし、母は家で翻訳の仕事をしてましたから、いつも二人で代わる代わる家事を……」

「なるほど。で、あんたは食べないの？三人分の肉、全部あたしが食べてるじゃないの」「今は、欲しくないの……」

ピーターはしばらく肉を食べていなかった。というか、どうしても食べられなかったのだ。

料理は、最近ようやく元どおりにできるようになってきていたが。

「そう……?」

ベルタは、ピーターを気にしながらも、パクパク食べ続ける。

「食べ盛りなのにねえ……。まあ外の空気を吸うと、また食べたくなるかもね。それに、船にはあたし以外にも護衛がつくから、ここにいるよりも安全だろうしねえ」

ところが――

「つて、何？ え――!」

大型フェリー船の前。

ピーターとリンダから少し離れたところで、ID時計でこそそ通信をとっていたベルタが、いきなり大声をあげた。

「どうしたんです?」

ピーターが駆けつけると、ベルタはID時計を離し、思いつ切り顔をゆがめていた。

「護衛はあたしだけですつて!」

(八)

「何があったんです?」

ピーターは、困惑するベルタにたずねた。

「西ユーラシアの複数のメディカルセンターに侵入者があって、薬が奪われたそうなのだからこちらに人員を送れなくなっちゃって」

「そうなんですか」

と言いながら、ピーターはすでに盗聴によってこの事実を知っていた。ただわからないことがある。

「盗まれたのは何の薬なんです?」

「すべて被ばく治療用の治療薬」

「被ばく……」

ベルタはうなずき「ここだけの話だけど、犯人がピネロン人なら、ちよつと同情できる」

「同情?」

「しっ」

ベルタは人差し指を立て、声を落とす。「上官からの話。向こうの独裁者サマからとは違うルートで、負傷者のために薬を送ってほしいとの依頼があったらしいの。人道目的だか

らと違ってね。でもあの木星戦のあとだったから、上がすべて却下したらしい」

「僕の父がからんだあの事故の」

ベルタはうなずき、「もともと放射線が多い星だから、それ用の薬はあるんだろうけど、全然足りなくて困ってるって。地球人用でもいいから欲しいって」

「それは……」

「そうよね。それに地球人の負傷者だっているはずだし、何人もとり残されてるだろうし。それに噂どおり、捕虜になってる地球人が放射線の多い環境で働かされてるとしたら、戦争とは別に、ほおっておける問題じゃないはずなんだけどね」

「……」

「でもあたしたちごときじゃ何もできない」

「……」

やがて三人は船への乗車を許された。

船室に入る彼らと、すれ違った清掃担当の二人は――

「あれ？」

「なんだ、マック」

パイクとマックだ。清掃員の格好をしている。

三人が船室に入ったところで、マックは首をかしげ、

「兄い、あの男の子、どっかで？」

「見た。調べたら、ソクラトン教授が預かってる子だった。今回の戦争の発端となった爆発事故に巻きこまれたロバート・ヨハンセンのひとり息子だ」

「な、なんでここに？」

「知らんよ。ただ後ろにいるド派手な女は、軍人だ」

「へ？なんでわかるんです？」

「軍のバッチを付けてた」

「……はああああ、さすがすげえや！」

「まあ、護衛かもしれないなあ。ガキどものと最新兵器の」

「最新兵器？」

「ほうよ」

「兄い、オレ何も聞いてなかったが、今回の仕事はこの依頼で」

パイクは首を横に振り、「今回の仕事じゃねえ。どこからも依頼されてねえ。オレらを守るためのネタ探した。……ほら到着したようだ」

「へ？」

外から轟音。

マックは窓から外を見る。

港にいつのまにか、巨大なコンテナが届いていた。

しかも複数。

それらはすべてフェリーに横づけされた。

「あれは？」とピーター。

ピーターたちは、船室に荷物を置いて、デッキに出てきていた。

「教えると機密違反」とベルタ。

「今までにも教えてくれたじゃないですか？すでに違反してますよ」とピーター。ベルタは苦笑し、

「じつはね、上官からあなたにはいろいろ話せと命令されてるのよ。責任はすべて自分とするって。監視対象に対しては絶対ありえないことだけど」

「ロペス中尉がですか」

「理由は知らないし聞かないわ。あたしは軍人。上の命令には逆らえない」

「……」

「で、あなたの質問だけど、あれは最新式の迎撃兵器。バラしてるけどおそらく二台分。付属装置も弾薬もいっしょに来てる」

「迎撃？……弾薬！」

「迎撃兵器は、宇宙からの攻撃が行われた時それを防ぐためのもの。世界各国に設置する前にまず、北米の兵器工場から、南米にある内地基地に持って行く。そこで訓練をする。海があるからもしものさいにも安全だからと……」

ピーターは驚いた。

「そんなものをこの船で運ぼうと？！子供たちがいるのに！なによりこれは軍用船じゃない、民間船ですよ！」

「軍用機も軍用船も、今は余裕ないの。だから民間に協力をお願いするしかないのよ」
「でも、あんなものをついでに運ぼうなど……」

そう言いかけて、ピーターは頭に生ぬるい衝撃を感じた。

振り向くと――

「ピネロン人だ！」

「出ていけ！」

十数人の子供たちが、離れたところから、卵を投げつけてきている。

「こら！」ベルタが叫んだ。

「パパを返して、ママを返して！」

卵がなくなると、そう叫びはじめた。

「やめんか、ガキども！」

しかし子供たちは言うことを聞かない。

堪忍袋の緒が切れたベルタ。

子供たちに飛びかかろうとして――

「きゃあ！」

リンダの叫びが響いた。

すぐに子供たちの動きが止まった。

みな真っ青になっている。

リンダがピーターの前で倒れ込んでいた。

「リンダちゃん！」

「リンダちゃん！」

ピーターとベルタが、リンダの前へ駆け寄ると、近くに石が落ちていた。見ると、何人かの子供たちは逃げ、何人かは真っ青になってその場にかたまっていた。彼らのうちの誰かが、隠し持っていた石を投げ、それがピーターをかばおうと彼の前に飛び出したリンダに当たったのだ。

石はリンダの頭に向かったが、幸いなことに頭を瞬時に腕でかばったため、腕に当たっただけで済んだこともわかった。

状況を確認したベルタは、子供たちに向かって怒りを放つ。

「ガキども！」

「違う！違うの！」

リンダが声をあげた。

そして、よろよろ立ち上がった。

子供たちに対し、泣きながら叫ぶ。

「違うの！ピーターも、あなたたちと同じなの。同じようにパパやママがいなくなったの。地球人もピネロン人もハーフもないの。パパやママが死んだらみんな悲しいの！みんな悲しくて辛いの！ピーターも、あなたたちも……。」

悲しいよね、つらいよね。でも痛いことしたって、誰も戻ってこないのよ！パパもママも帰ってこないのよ！わたしの、パパもママも……。」

リンダは渾身の力をふり絞って叫んだ。

「もういいから！」

ベルタは、リンダを抱きかかえた。

そして船員たちが駆けつけてきた、子供たちを追って。彼らは食堂から卵を盗んでいたらしい。

ベルタは船員たちをなだめ、あとで補償するからと言って、なんとかその場から彼らを払った。

何人かの子供たちは立ち尽くし、何人かは泣き出していた。ピーターは、ベルタの腕の中で泣くリンダを見やっていた。

(子供の声？泣き声？)

ステッキをもった教師風の男が、少しげんそうな顔をしながら、フェリーを見やっていた。

変装したステイツキイーであった。

(九)

夕闇が迫るなか、フェリーは進んでいた。

「リンダちゃん！」

ピーターは、息を切らしながらデッキにあがっていった。

腕に包帯を巻いたリンダが、何人かの子供たちといっしょに、闇の中に沈もうとしてい

る海を眺めていた。

ピーターはほっとした。

ベルタが船員たちとの打ち合わせに船長室に向かったあと、リンダが姿を消し、ピーターはあわてていたのだ。

リンダのおだやかな顔を見て、さらにホッとした。

その場にいた子供たちは先ほどの一部ではあったが、ピーターに気づき、ごめんなさいと頭を下げた。

リンダは楽しそうに子供たちと話をしていた。彼女が、自分やソニカ以外の人間と会話をしているのを見るのははじめてだった。ひとりで行動するのも、はじめてだった。

やがて、フェリーを監視する飛行機が飛ぶ空にも、闇が迫ってきた。

「もう夜だよ。そろそろ戻らないと……」

夜間は監視がしづらくなるため、見張り以外は船室で待機、というのが規則であった。子供たちは帰っていった。

しかしリンダは動かない。海を見やっている。

丸い月が、海に浮かんでいた。

「おねえちゃまは、この先に？」

「ここは大西洋だ。ローレル島は太平洋だから……」

「でも海でつながってるわよね」

「ああ」とピーター。

リンダは空を見上げ、「宇宙もつながってる」

「そうだね」

「あの子たちのパパやママ、わたしのパパやママ、ピーターのパパは、どこにいるのかしら」

ピーターも、星がまたたきはじめた空を見上げた。

「身もフタもないけど、この先にあるのはピネロン星だよ」

「ならその向こう、星の向こうにいるのかしら」

「そうかも」

ふたりは静かに、遠い空を眺めていたが――

突然、爆発音！

「な、なに！」

船長室にいたベルタも驚いた。

「なんなの！」

控え室にいたパイクとマックも驚いた。

「な、なんだよ！」

爆発音のあと、警告音が鳴り響いた。

ピーターとリンダは、船長室に飛び込んだ。

ベルタもいたが、彼女は船員たちから無視された状態。

「船長ダメです!」「今度は舵が動きません!」

船長を含めた船員たちが、必死で持ち場の機械を操作していたのだ。

「いったい何が」とピーター。

「あたしにもわかんないわよ」とベルタ。

ようやく船長が答えた。「船底で爆発が!」

さらに――

また爆発音!

船内の明かりが消えた。

今度は船がゆらぎ始めた。

「な、なんなの!」

室内は、機械や器具から発するわずかな光のみとなった。

船員たちは懸命に機械を動かしていたが――

船長が、ついにベルタに向かって声をあげた。

「軍曹、軍からの即時救助を要請して下さい!このままでは沈没する!」

「はあ?冗談でしょ!いきなり?……遮断できないの?」

「遮断壁が動かなくなつて、このままでは浸水が止められない!……電力不足です!最低限の維持機能にしか使えない」

「バカな!日中蓄電してなかったの?」

「蓄電分すらほとんど吸いとられてしまったようで……ほとんどなにもできなくなつてます!」

船が揺らいでいる。ベルタは決断した。

「了解!」ベルタはID時計を押して光を出し、ピーターとリンダを見て「ふたりとも、

子供たちをデッキへ!」

「はい!」ふたりはうなずいた。

(十)

月の光と、各自のID時計からの明かりを使って、子供たちや船員たちがデッキの上に集められていた。

寒さに震えることはなかったが、船は揺れ、子供たちはおびえていた。

ただ、爆発音はあれから響くことはなく、船はまだ沈没する気配もない。

ピーターはいぶかった。(まさか……ぎりぎり沈没しないよう操作されてる?)

そんななか、救援はすぐにやってきた。

軍の小型輸送機が二台。

「え?」

ベルタは拍子抜けしていた。「小さい!」

しかも、デッキでひしめく人間を無視し、船の側壁につけた。

どちらもホバーリング状態で、そのまま待機。デッキの上には上がってこない。

「はあ、何やってんの!」

ベルタは驚き、デッキを降りるが、ふと気づいて引き返し、
「ピーター、リンダ、ついてきて。あんたたちも来るのよ」
「え？」とピーター。

子供たちを置いていくのか？

「あたしの仕事はあんたたちの護衛もあるの！離れないで！」

ピーターは、従わざるをえなかった。

三人はデッキを降りると、車両甲板が開き、甲板に置いてあるコンテナの一部が、何人かの兵士たちによって輸送機に積み込まれようとしていた。

「な、なんなの？」

あたりには、輸送機からの轟音と、風が吹きすさぶ。

「あんたたちはそこにいて！」

ベルタは、ピーターとリンダを待機させ、輸送機に近づこうとするが、途中で輸送機のドアは閉まり、フェリーから離れ上空へ。

あつけにとられるベルタ。

入れ代わるように、すぐにもう一台が甲板に付けた。

ドアが開き、出てきたのはキニスキー。

「ディミトリ！」

ベルタはつかみかかろうとして、寸前でキニスキー護衛の兵士に止められる。

「どういうこと？あたしは人命救助を要請したはず！」

「人命を救うために来た。同胞を守る重要兵器を回収するために」

「ここにいる子供や船員は同胞じゃないの？あー、またまた軍の規定を忘れたんですかあ？」

「黙れ！上官にたてつくな！お前があの時守ったのは敵のピネロン人じゃないか！今回もまた……」と、ピーターを指さし「汚らわしいピネロン人を連れてくるなど！」

「ディミトリ！」

「私はキニスキー少尉だ、グラナド軍曹！それ以上軍規を乱す物言いは許さん！」
さらに部下たちに向かって命令する。「三人を機内へ！」

命を受けたキニスキーの部下たちが、ピーターとリンダのもとに走る。

リンダはおびえながらも、怒りの表情を浮かべ、兵士の手を払った。

「リンダちゃん！」

ピーターは厳しい顔でリンダの手を握り、「今は従うんだ」と、リンダを諭す。
ベルタだけはなおも抵抗する。

「子供たちはどうする気！ビッツ総司令からの命令なのよ」

「状況が変わった。優先順位がつけられた。最優先は迎撃兵器本体の回収」

「総司令の命令？」

「そうだ」

「親が死んで後ろ盾がない子供たちだから、文句言われないからどうなってもいいと？」
「……」

「だったらあたしを置いてけ！わたしはそんな命令など聞いてない。あんたが言ってるだけじゃ信用できない。あたしは子供たちを守れとの最高位からの命令だけにしたがう」

ベルタの剣幕に、キンスキーははあとため息をつき、
「正確には、ティエン外地司令からの命令だ。まあ当然、ビッツ総司令の意向も入っているだろうがな」

「はあ？」

「外地司令は今、月だ。お前宛ての直通通達ルートがないから俺が伝えるのだ。お前を……ベルタ・グラナド軍曹を絶対回収しろとは、外地司令からの直々の命令だ！」

「……か、あいつ！」

「その物言いはやめろ！命令に従え！」

ピーターたちが機内に移されたことで、しぶしぶベルタも輸送機に乗る。

機内でもピーターとリンダは兵士たちに囲まれる。

リンダは、ベルタとともに立っているキンスキーの背中を後ろからにらみつけていた。

キンスキーは気づかないが、

彼はようやくほっとしたのか、ベルタに向かって、

「グラナド軍曹、誤解があるようだから言っておくが、我々は人命救助は放棄していない。迎撃兵器本体以外の付属装置や軍需物資の回収は、子供たちを救出したあとになる。……大型の輸送機が手配できしだいこちらに来るはずだ。それで子供たちは救助されることになる」

「間に合わないかもしれないじゃないの！」

「今は戦争中、戦時体制だ。大勢を守るのが先だ！」

迎撃兵器も積み込まれ、輸送機はフェリーから離れ始めた。その時――

上空で大きな爆発音！

見上げると、先に飛び立った輸送機が大爆発を起こしていた！

キンスキーもベルタもピーターも、すぐには何が起こったのかわからなかったが、

「きゃあー！」

リンダの叫びと同時に、輸送機が大きく揺らいだ。

「側壁から火が！」キンスキーの部下が叫んだ。

これで全員が理解した。

外からの攻撃にさらされている！

フェリーのどこかから、この機体に攻撃が加えてられている。

ピーターが叫んだ。「フェリーに近づけろ！」

キンスキーは驚き、「黙れ！」

しかしベルタはピーターに同意。

「フェリーにくっつけて！」

輸送機は再びフェリーに最接近。

すると、攻撃は止んだ。

「やはり……」とベルタ。「そばで機体を爆発させると、自分の身が危ないとわかってる」キンスキーも認めざるをえなかった。なるほどとうなずいて、「フェリーに残されてる弾薬に引火する危険を知ってるということか」

「なら、相当念入りに情報をとってたのね」

ベルタはいまいましそうに舌を打ち、

「犯人はおそらくデッキから。でも複数ではなさそうね。……デIMITリ、この機体、まだ大丈夫よね」

「重要箇所には当たってない」

「だったら、フェリーにくつつけたままデッキの上にあげて。操縦席の前、開けて！」

「……狙うのか？」

「それしかないでしょ」

ベルタは、自分の服の中から、隠していた銃を取り出した。

折りたたみ式だ。それを瞬時に伸ばした。

「それではパワーの差が……」とキニスキー。

「今は正確さが重要！使い慣れたものを使う！」

ベルタは操縦席の前で銃をもって構え、他の者たちは背を低くした。

輸送機はゆっくり、デッキの上が上がっていった。

「軍曹、開く面積は大きい。素早く狙え！」

操縦席の前部が開けられた。横一面、高さは人ひとりが通れるほどだ。

デッキにいる子供たちの声が、機内に聞こえてきた。

ベルタは、窓の外に銃口が見えないように構え、そして――

「いた！」

しかし――

「うわ！」「きゃあー！」

同時に、開いた前面から、レーザー光線が機内を貫通。しかし壁を破壊した程度。

「やっぱりパワーを落としてる」

ベルタはにやりと笑い、再度銃を放つ。

やがて静けさが覆う。

しかしベルタは動かない。

キニスキーがゆっくり操縦席に近づき、双眼鏡でデッキを見た。

「血しぶき？そうかあそこに」

「まだ。致命傷かどうかわからないわ」

「なら賭けだ。動かせ！」

そうキニスキーが指示したとたん。大きな影が彼の前を通る。

トランクをもったピーターが、空いた部分から、すべるように下に飛び降りたのだ！

「ピーター！」

「ピーター！」

機内の全員がかたまってしまうが、そのすきにキニスキーは操縦席前部を閉め、自ら操作し輸送機をいっきに上昇させた。

ベルタは立ち上がって、彼につめ寄り、「デIMITリ、てめえ！」

「ピーターを助けて！ピーターを！」リンダは絶叫する。

しかしキニスキーは突き放すように、

「今は迎撃兵器の回収が優先！」

ベルタは叫ぶ。

「この……岩石頭！」

(十一)

(うかつだった……)

フェリーのデッキの隅では、黒ずくめの男が脇腹を押さえ、ステッキを投げ出し、座り込んでいた。

ステッキイーだ。

こめかみには、隠していたピネロンマークが浮き出していた。

背中には、何か荷物のようなものを背負っていた。

背後の手すりには血が飛んでいた。わき腹と太ももから血がにじんでいる。

(ちゃんと止血してる間もない。だが幸いなことに弾は小さかった。なんとかもつだろう。……まもなく迎えが来る。さっきの爆発が目印だ)

立ち上がった彼の耳には、子供たちの声が。

少し先、デッキの中央部に、子供たちが集まってきていたのだ。

(あはれ！)

自分を救ってくれた子供たちがいる！含まれている。

(なぜここに?!)

彼らの間から、トランクを持った青年がよろよろ立ち上がってきた。

その情景を見やっていると――

「何者だ！」

うしろからの声に、ハッとなった。

異変に気付いた船員の何人かが、デッキの隅に駆け寄ってきたのだ。

「邪魔だ！」

ステッキイーは、ステッキを掲げて彼らにレーザー光を発射。声をあげることなく全員その場に倒れる。

彼はすぐに、船内へと向かう。

(何考えてる。俺はすべきをするのだ。そうでなければ俺はまた……)

脇を押さえ、足を引きずりながら、考えていた。

(俺は関係ない。だいたいあいつらのような経験は俺にはないし、あいつらに俺や俺の星のガキたちのような経験など……)

物心着いた頃から、考えることと言えば、ただただ食べることしかなかった。

口に入れて体を壊さなければまともな食べ物だった。そうでなかったために苦んだ記憶がいくつもある。殴られて痛かった記憶もいくつもある。

地下世界の端――闇の中では、常に追い立てられる記憶しかなかった。仲間もいなかった。それよりも自分がどうやって生き延びるか。

内戦で破壊されたインフラが、再び整備されはじめた地下世界で、かいくぐるようにこじ開けるように、食べ物を探していた。

飢えはおそろしかった。まともな食べ物でなかった時の体の苦痛も、耐えがたかった。だからまともな食べ物を得るためなら人も殺していた。

そんななかでの最初のはつきりとした人間の記憶は、ザイだ。今ゲルゴン・ザイと名乗ってるあいつだ。

気がつくとき、自分のまわりには、自分と同じような年頃の子供たちがいた。それまでは、事あるごとに殺し合ってきた連中だ。彼らとの争いには必ず報復があった。しかしザイのもとは、互いにそんな危険なことをする必要はなくなった。

ずっとザイは「親」というものなのかと思っていたが、実際には自分とはあまり歳が離れていなかった。当時まだ十代の子供だったことをあとから知ったのだ。

それでもともかくザイに従ってさえいれば、飢えは回避できた。だから言われたことをこなした。

身体的修練のみならず、さまざまなプログラムの読解や解説をさせられ、最終的には脳波を解してそれらを書き換える術を教わった。

名前というものも、奴から正式に与えられた。

「お前に魔法の棒を与える。地球の言葉でステッキというらしいから、これからのお前の名前はステッキイでいいかな」

——そんなものは何でもよかった。飢えさえなければ。

待遇はどんどん良くなっていった。飢えることはなくなったはずだったが、なぜか逆に飢えへの恐怖が増していった。

ホイヘンスの前に連れてこられたさいには、彼に忠誠を誓えと要求された。

地球へ行けと命令を受けたさいには、地球が落とした爆弾での被害者たちが収容されている病院へ連れていかれ、女性や子供たちが苦しんでいる様子を見せられた。

「ホイヘンス様に忠誠を、祖国に命を捧げよ！」

感じたのは、怒りよりも恐怖。

苦しむ子供たちの苦痛が自分に伝わる恐怖。そして、従わなければ必ず飢えるだろうとの恐怖……。

警告音が鳴り響く

(ちっ！俺は何を考えてる！)

今は使命を果たすことだ。

サップスたちを地球に潜入させるルートをつくり、地球の最新兵器や軍事物資を海の藻屑とさせる。

一部は破壊できなかったが、やむをえない。地球に恐怖を与えることも自分の使命なから。

そしてあらたな使命もこなし、祖国にいったん帰国する。

しかし、先行きが怪しくなってきた。

わき腹と足の痛みが激しくなってきた。

(しっかりしろ！任務を果たせ！でなければ、いつまでたっても俺はこうした痛みから、
飢えから、解放されない！)

氣力をふり絞り、ステッキを掲げて、レーザー光を放った。
大きな爆発！

(これでこの船は、沈没する！)

引き返そうとする——

「待て！」

目の前には、長い髪とマントを付けた、アイマスクの謎の人物が立ちはだかっていた。

(遅かった、間に合わなかった……)

遊星仮面——ピーターは、ステッキを前にして唇を噛んだ。

彼はデッキに飛び降りたさい、意識を一時的に失っていたのだ。

右上半身、特に右腕を強く打って、デッキの上に仰向けに倒れ込んでしまった。

目を覚ますと、子供たちが心配そうにとり囲んでいた。

大人たち——船員たちは駆けずり回っていた。突如降ってきた自分にも、ほとんど気づ
けないような状態だった。

大型輸送機が救援に来ることが知らされても、待つてはいられないと、急ぎよ救命ボ
トを用意していたのだ。

兵士がいたら尋問されていたはずだが、そうはならなかった。

ピーターはホツとし、自分をとりまく子供たちにたずねた。全員そろっているのかと。

彼らは首を横にふった。数人がまだ船内に中にいるらしいと。

心配する子供たちに、デッキから落ちないようにと注意したあと、

「君たちのお友だちを探してくる。みんな、そこにいるんだ！おじさんたちの指示に従
て！」

子供たちがうなずいたのを見て、ピーターは船内へと走った。

船内でトランクを開けた。そして、遊星仮面となった。

遊星仮面の格好だと、闇でも先が見える、生身でいるよりはるかに音を正確に拾える。

船内の電力不足で開かなくなっていたドアをシューターで次々壊し、閉じ込められてい
る人々を救った。そしてデッキへの避難を指示した。

子供たちも見つかった。

皆、驚きつつも、彼の指示に従った。

パイクとマックもいた。

「ゆ、遊星仮面！」

二人は叫んだ。

まだごくわずかな人間にしか知られていないはずのその名を呼ばれ、ピーターは驚いた
が、事情をたしかめている時間はない。

声を出すとマズイと察し、黙って指で逃げろと指示した。

逃げようとしないう二人だったが、シューターを投げつけて脅し、言うことをきかせた。

(ふう……)

デッキに子供たちを残したことが気になるが、まずは船内に入ったテロリストを追わないといけない。

そんな矢先に、爆発音が。
そして、ステッキィーと遭遇したのだ。

「お前は……そうか、お前が遊星仮面か！」
名を呼ばれて、ピーターは一瞬ひるんだ。
しかし、それで意識を切り替えた。
そう、今自分は遊星仮面なのだ！

(十二)

「迎えを待つ気か？」

遊星仮面としての第一声だった。

ステッキィーは驚く。

「ピネロン語が話せるのか」

「船を直せ！電力を戻せ！君ならそれができるはずだ」

「だがなまりがある」

「聞いているのか？電力を戻せ！」

「否！」

ステッキィーはステッキをかざして、レーザーを放つ。

遊星仮面はかわす。レーザーは船室のドアを貫通。

衝撃でステッキィーは、その場に倒れ込む。

周辺に血が流れている。息を切らしている。

遊星仮面は顔をゆがめ、

「ひどいケガだ」

「黙れ！」

ステッキィーは立ち上がり、ステッキを掲げようとする。

「待て！」遊星仮面は手で阻止し、「背中のは薬か？被ばく用の薬か？」

「は……驚いた。なんでもご存じか。そうだ、地球の爆弾で殺されかけたわが国の民を救うためのだ。お前がピネロン人ならここを通せ！」

「僕……いや私は地球人だ！」

「合点がいく……それなら！」

ステッキィーは、ステッキを遊星仮面に向けた。

遊星仮面は手を上げ、

「よせ！これ以上の破壊は危険だ！この船には子供たちが乗っているんだ！」

「はあ？」

「子供たちが乗ってるんだ！」

「関係ない！」

「関係ある！」

「救命ボートがあるはずだ」

「出すタイミングが遅れた。今この船が沈没すればボートは巻き込まれる。それよりもこの船は軍事物資を積んでる、弾薬を積んでる。君はそれを知ってるはずだ！」

「だからなんだと……」

「なんらかの刺激で爆発でもすれば、広い範囲が巻き込まれる。……子供たちを殺す気か！」

「子供……」

「電力を戻すだけでいい、遮断壁が動けば沈没は回避できるかもしれない。子供たちを助けてくれ」

「地球のガキのことなど、俺は知らん！」

「子供に地球人もピネロン人もないだろ！頼むから自分が子供だった時のことを思い出してくれ！」

「ふざけるな！」

「子供たちは大人の戦争には関係ない！何も知らない子供たちを宇宙や海のもくずにしてしまうのは、人間がすることではない！」

「うるさい！お前こそなんでそんなにこだわる！」

「それは……あの地球人の子供たちの親は、僕が殺したかもしれないからだ。それに、ピネロン人の子供たちの壮絶な痛みも、命を落とすことも、阻止できなかったからだ！……だから絶対に阻止する！君があの子たちを殺すことは、絶対に阻止する！君を殺してでも絶対に！」

遊星仮面の声は、完全に裏返り、絶叫に近かった。

(痛み……)

少しあつけにとられていたステッキイは、その言葉にハッとされた。

彼の頭には、自分を助けてくれた子供たちの顔が浮かんだ。

祖国も、祖国で苦しんでいた女性や子供たちも、自分に何かをしてくれたわけではない。しかし、彼らが自分に何かをしたわけでもないのだ！

なのに自分は彼らに、ずっと痛みと苦しみだけを与えてきた。

かつて、飢えをしのぐために自分より弱い者たちを、自分を助けてくれたあの地球人の子供たちと同じ年頃の子供たちを、殺してきた。女性も殺した。自分に食べ物をくれた親切な老人も殺した。報復されないことをいいことに。

そんなことを思い出したくもないから、さらにその後も殺してきた。それでも飢えはおさまらなかつた。

しかしあの子たちは……。

殺したくなかつたのだ。これ以上の飢えと痛みが降りかかってくることは耐え難かつた。だから殺さなかつたのだ。

自分にとっての飢え……それは食べ物だけではなかつたのではないか！

水の轟音が聞こえてきた。近くまで浸水してきている。ステッキイーはステッキを掲げた。

遊星仮面は構えるが、

「違う！」

ステッキイーがそう叫ぶとステッキは光った。

そして、ため息とともにステッキを落ろし、

「機械が再稼働すれば、奥から遮断壁は動いてくる」

遊星仮面は驚き、「そうか、電力を戻してくれたのか！……ありがとう！」

「礼など無しだ」

「うわっ！」

遊星仮面は倒れた。

ステッキイーが、レーザーを遊星仮面の足元に放ったのだ。

「油断したな、これぐらいの力は残している」

「くそ！」

「はははは。お前が俺を倒しても、これからどんどん俺の代わりは入ってくる。そのように俺は操作した。すでに本国に報告済みだ！」

遊星仮面はシューターを出そうとするが、

「くっ！」

いつものように右手で出そうとして、痛みで中断する。

ステッキイーはハッとし、

「右腕を痛めてるのか……そうか、お前はさっきの……うわっ！」

遮断壁の動作が正常化した。突如上から落ちてきて、ステッキイーは下半身がはさまれてしまった。

「くっ！」

ステッキイーがはさまったために、クッションにはなったものの、動きはとれない。

どうしても抜け出せない。

そのうちに遊星仮面の足元にも水が入り込んできた。

ステッキイーをはさんだ壁を破壊しようと、左手でシューターを取り出すが、

「よせ！まもなくそちらの遮断壁も下りる。それに、俺はここから出られても逃げきれん。このケガだ。それより背中の中のものをとれ！」

「背中？……薬か？」

「とれ！」

遊星仮面はシューターを使って、背中の中のものをつた。

「そこに俺のステッキの破片が落ちてる。それを持って行けば証拠になる。この薬を迎えの宇宙船に届けろ！お前ならできるだろ？」

「……なぜ？」

「ピネロン星にも子供はいる。彼らにお前らが何をしたかを考えろ！それに俺は孤児だった。せめてピネロン星の内戦が何で起こって何があったかぐらいは調べろ！」

「君の名は？」

「そんなものはない！離れろ！遮断壁が降りる」

「……わかった」

遊星仮面はステッキイーに背を向けた。走り出すと、すぐにうしろで遮断壁が降りる音が響いた。

水がステッキイーをおおっていく。

（なんてザマだ……ザイに一言礼を言いたかったが……まあ、あいつもいつかは俺のところに来るからな……）

子供たちの顔が目に見えなくなった。

（たずねることができなくなってすまない……せつかくの絵を破ってすまない……）

そして、わずかに笑みを浮かべた。

（ああ、これでもう……乾くこともない、飢えることもない……痛みを、恐怖を感じることもない……）

やがて彼の体は、船の外へ出て、海の底へと沈んでいった。

(十三)

南米の港――

小型軍艦が一隻停泊していた。

港には何人もの軍人に混じって、冬服を着たリンダにベルタ、それにソクラトンが待っていた。

軍艦からは人が大勢降りてきた。フェリーに乗っていた船員や子供たちだ。

右腕をつって、左手でトランクを持ったピーターも、冬服を着て降りてきた。

「ピーター！」

リンダが飛びついた。泣き始めた。

「ピーターのバカバカバカ！」

ソクラトンとベルタはホッとした顔をしていた。

「教授、すみませんでした」と、ピーターは頭を下げた。

「無事でよかった。無茶しおって……」

ソクラトンはポンと、ピーターの肩をたたいた。

ソクラトンもベルタも、彼の行動についてはそれ以上追及しなかった。

ホッとしたのかリンダは、ベルタと顔を見合わせて笑った。二人はいつのまにか仲良くなっていた。

「結局輸送機を送れなくて。ごめんなさいね。救助に時間がかかってしまって……」とベルタ。「フェリーが運よく沈没しなかったからよかったもの、夏だったからよかったものの、救命ボートを無事全部回収できたから良かったもの……」

「しかたあるまい」とソクラトン。「輸送機は急ぎよ、テロ被害者への救援に振り向けざる

をえなくなっただからな」

ピーターは複雑な表情で、「サップスが、もうそんなに入り込んで？」

ソクラトンはうなずき、「彼らのあらたな侵入を防ぐために、今科学者たちは結集して対策を練っておる」

「で、今後はディミトリみたいな連中が、ますます警備をかためてくんでしょうけどね」とベルタ。

ピーターはおずおずとベルタにたずねる。

「あの、少尉とはどういう？」

「え？……ああ、軍の同期」

「同期？」（歳は離れているのに？）

「ともかくそれだけよ。でないとなんかイカれた奴と接点だなんて！」

「それでも、今は彼の機動力は貴重なのだ」と、ソクラトンは小さな声でつぶやく。

ピーターはギョツとして、リンダを見た。

幸いにも、ソクラトンの言葉は彼女の耳には届いていなかったようだった。

「教授……」

「ひどい目にあわされたのに、と思うだろうが、今回は本当にやむをえなかった。詳しいことはあとで話そう。……と、まだ解放されそうにもないようだな」

ピーターは兵士から呼び出された。

陸に上がっても、軍艦の中と同様、軍からの尋問が続いていた。

それまでにわかったことは——爆発が三度あり、船底は破壊されたが、途中から電力が正常に戻り、遮断壁が機能して沈没は免れたこと。三人の船員が謎の死をとげていたこと。

電力が戻ったとたん、二人の不審人物が監視システムにとらえられたが、鮮明ではないため、後日専門家の手にまわすこと。一部の船員や子供たちが、「髪の毛の長い、マントとアイマスクをつけた人物」が助けられたと証言していること。

さらに不思議なことも報告されていた。いきなり明るい光と機械音が響いたかと思えば消えた、謎の現象があったのだと。

そんななかピーターは、どの取り調べでも当時の行動を厳しく追及された。いきなりフェリーに乗り込んできたことと、子供たちを救うためだとして船内へ向かったことが、特に怪しいとされたのだ。

とはいえ——

「お兄ちゃんは怪しい人じゃない！」「あたしたちのことが気になって、助けに来てくれたのよ！」

「な、なんだ！」

ピーターをとり調べていた兵士たちは面食らった。

どの取り調べでも、なぜかいつのまにか子供たちが集まり、ピーターを擁護してくるのだ。

兵士たちは子供たちを追い出そうとするが、たいがい彼らは動かない。

そうなるや兵士たちは、追い出すのをあきらめてしまう。彼らの預かり先が誰なのかを知っているためなのかもしれない。おかげで、ピーターへの尋問も簡略化されることとなった。

その中でピーターは、船内へ行こうとしたものの、ケガを負っていたために途中で気を失ってしまったのだと語った。彼の持っているトランクも怪しまれたが、開けると中身は空だった。

やがて尋問は終わった。

「みんな、ありがとう。」

ピーターは腰をかがめ、子供たちに視線を合わせて礼を言った。

子供たちは得意げだ。「お兄ちゃんこそ、ありがとう」

「体には気をつけるんだよ」

そう言っつてピーターは手をふりながら、ソクラトンたちが待機している場所へと向かっていった。

子供たちも皆手をふった。そして兵士たちに連れられ、ピーターとは逆方向へ。

何人かが、歩きながらひそひそ話を。

「お兄ちゃんの声、似てるね」

「何に？」

「あたしたちを助けてくれた人よ」

「ああ、そうだ！」

「そうなの？」

「そうよ。髪が長かった。おじちゃんと同じよ」

「パパを助けてくれた人にも……」

そして――

「黙っつていようよ、おじちゃんにも言われたじゃないか」

「そうだね」

「あたしたちだけの秘密にしようね」

全員がうなずいた。

「おじちゃん、たずねてくれるかなあ」

やがて全員、待機していたバスに到着した。

バスからは、迎えの兵士たちが出てきた。

そこには、すっかり軍服が似合っつてしまつていたレザールの姿も。

「ちくしょう！まさかこんなことでIDいじられるとは思ひもよらなかつたぜ！」
パイクとマックである。彼らも尋問を受けていた。

解放されたあと、港の隅でぼやいていた。

「ピネロン星のテロリスト野郎のせいで、個人データのチェックが厳しくなつてるからなあ。俺らがもらつてる「偽造可能枠」に気づかれるんじゃないかと、ヒヤヒヤだつたぜ。しかも、何度も何度も同じこと聞きやがつて！」

「だけど、兄い、本当のことほとんどしゃべらなかつたじゃないか」

「お前が余計なことをしゃべらないかとひやひやしたよ。……いいか、遊星仮面の秘密は俺らが調べるんだ。いざという時身を守るためにも、情報の武器をもつとくことが必要なんだよ」

「それにしてもあんな絶好のチャンス。あっさり逃したじゃないか」

「あの場合は……やむをえねえ！命あつてだ。だがいいもの見ちまったよ」

彼らは、遊星仮面に助けられたあと、船内への出入り口付近で、遊星仮面が戻ってくるのを待っていた。

デッキの端で。近くには誰もいなかった。

その時、いきなり上空から光が。

同時に、眼下の船の側壁から、いきなりロケットのようなものが飛び出した。

それが光に突入し、消えた。

何事かと思っしてしばらくその場にいたら、しばらくしてまたロケットのようなものがいきなり眼下に飛び出し、側壁に突進し、すぐに消えた。

そしてしばらくして船内から、トランクをもったピーターがよろけながら出てきた。

「あれは木星で、遊星仮面が乗ってたのと同じ乗り物だ。それにあのピーターってガキ、相当に臭すぎる」

「チクるんで？」

「バカ、そんなことするか！単に憶測だけじゃあ武器になんねえ。もつと正確な証拠を手に入れないと。……ん？」

車の音が響いてきた。

子供たちを乗せたバスが発しはじめたのだ。

「はあ、なんともまあ、これからはあの子らも軍の戦力になるんだよなあ。いや戦力ならまだいいんだが……」

「へ？学校に行くんじゃないのか？」

「学校といっても軍事学校だよ、内地軍の訓練施設に隣接した軍事学校の初等課さ」

「うえっ、兄い、なんでそんなことを！」

「調べりやすぐわかる。公開されてる情報だ。それにバスの中を見てみ？ここからでもわかるはずだが、バスの中にいるには軍人ばっかだろ？」

「はあ……なんと」

「保護者がいないことをいいことに、本人たちの意向も聞かずに、人員補充というべきか。問答無用に鍛えられて、いずれは戦地に送りこまれることになるかもしれないねえなあ。そこまで戦争が長引けばだが、そうなると悪けりゃ捨てゴマにされかねないかも」

「なんで？」

「戦局が不利になれば、若年や入りたてが激戦地に送られてくのが、歴史だからよ」
「ひえっ！」

子供たちが乗ったバスが去っていくさまをピーターも見ていた。

しかし彼のところからは、バスの中までは見えなかった。

彼はすでに別のことを考えていた。

(なんとか薬を届けてくれればいいが……)

あの時——船内から上に逃げる途中、ステッキイーを回収するための超小型宇宙船の飛来を察し、それと合わせて、ライダーを動かさせた。

そしてライダーのバリヤーで、彼らの宇宙船を包み込んで、宇宙空間へと運んだ。包み込んだまま、船内へと突入した。

乗っていたサップスらしい者が二名、驚いて攻撃をかけてこようとしたが、薬とステッキの破片を渡し、ピネロン星へ戻れと諭した。

なおも抵抗したために、シューターで脅した。

それでようやく引き返していったのだ。
(やりすぎたかもしれないがあれぐらいのことをしないと、彼の遺言は守れなかった。しかし……)

これからどんどん俺の代わりは入ってくる、とのステッキの言葉が引つかかっていた。現に彼のしわざで、サップスたちがどんどん入り込んできている。

でも、彼らも同じ人間なんだ。

人殺しは嫌だ。人殺しをせずに、戦争をやめさせることはできないのだろうか。

ピーターは、明るくなりはじめた空を見上げ、考えていた。

明るい空――

(ここは……)

ヤートは目を覚ました。

「目覚めた？」

若い女性の顔が、目の前にあった。

「心配したわ、ずーっと寝覚めなくって。点滴だけで体力が続くかと」

ヤートは徐々に気づく。清潔な服を着せられ、寝かされていることに。

左腕には包帯が巻かれている。そして――下半身にはおむつが。

「そりゃ許せ。食べなくても出るからな」と、男の声。

「あなたたちは？」

「簡単に言えば抵抗組織。ホイヘンスを倒すための。協力してほしい、ラフラス・ヤート」

「な、なんでぼくの名前を！」

ヤートは、数人のピネロン人の男女が自分を取り巻いているのを見た。